

# 英作文における日本語の干渉：発想と表現

## — 事例研究 —

宮 地 信 弘

Interference of the Japanese Language in Writing English  
in Terms of Thought Process and Expression: A Case Study

Nobuhiro MIYACHI

### はじめに

私は教育学部で「英作文 I (トランスレーション)」の授業を担当している。この授業では、英語ライティングスキルの向上を目指し、英語教師に必要な英作文の基礎的能力を養うことを目的として、日本人学習者が犯しがちな誤用例を参考にしつつ正しい文法と英語らしい表現パターンに基づいた英訳練習を中心に授業を行っている。以下の項目が学生の主たる到達目標としてシラバスに掲げている 3 項目である。

- (1) 誤用例を参考にして日本語と英語の発想の違いと特徴を認識する。
- (2) 文法的に正確な英文が書けるようになる。
- (3) 英語的な発想や表現構造に基づいた英文が書けるようになる。

具体的には毎回授業のはじめに 7 問ほど短い和文を英訳する小テストをし、テスト終了後すぐに各問題文に対する数種類の英訳例を提示して、日本語を英語に直す際に注意すべき点、特に日本語と英語の発想と具体的な表現の違いに意識を向けさせるよう努めている。また、辞書を活用して、じっくり時間をかけて英訳練習に取り組めるよう学期中に 3 回程度少し長めの和文英訳を課題として与えている。

小テストの結果は必ずしも満足のいくものではない。いろいろなレベルの間違いが毎回出ている。語彙力不足・基本単語の綴りの不確かさ・三単現の欠落・数の一致の間違い・時制のミスといった初歩的なものから基本文法の知識不足のため、ほとんど英語と言えないような英訳もあれば、日本語的な発想をそのまま英語に置き換えたような英訳まで多様な問題がある。テストは採点して翌週に返却しているが、その際、共通の間違いを指摘し、学生が意識せずに犯した間違いに気づかせるよう努めている。

自宅で行う英訳課題の場合にも問題は多い。受講生は和英辞書を頼りに英訳しているが、和英辞書を使ったからといって英語らしい英語が書けるとは限らない。日本語が伝えようとするニュアンスや含みに対する意識が乏しく、言葉の表面的な置き換えをしてしまう傾向があり、英語としての豊かさや自立性が十分でない英訳が少なからず目立つ。

この論考では、学生が英文でレポートを書くときに共通して出てくる問題点をいくつか指摘し、英語を書くときに日本語の発想がどのような次元で干渉し、どうすれば日本語による干渉を克服しうるのかについて考えてみたい。議論が一般的・抽象的になるのを避け、できるだけ具体的でわかりやすくするために、実際に現れた間違いをもとに考察を進めることにする。

## 母国語の干渉

われわれ日本人が英語を書くときに直面する一番大きな問題は日本語の干渉という問題である（これは書くときだけでなく、発音においても同様で、日本語の持つ音韻的特徴の干渉が見られ、日本人の英語の発音は日本語的な発音になる）。もちろん、母国語の干渉は日本人だけに限ったことではない。たとえば、フランス人の書く英語にはフランス語が干渉してくる。母国語の干渉という現象はいかなる外国語であろうと、それを学ぶときに必ず浮上してくる厄介な問題である。

この母国語の干渉は「読む」・「聞く」といったインプットの側面においても発生するが、最も顕著に現れるのは「書く」・「話す」というアウトプットの側面においてである。母国語の干渉とは、具体的にいえば、文章を書く（あるいは話す）時、我々は母国語の思考習慣と言語構造に従って文を発想し、母国語の文構造に即して具体的な言葉を選択し、その言葉をそのまま外国語に置き換えていく現象である。母国語（この場合日本語）の干渉を受けた英文は、伝えたい大まかな内容は伝わっても、ぎこちなく不自然な英文になることが多く、時には誤解を引き起こすことにもなりかねない。最悪の場合、全く意味が通じない文章になることもある。思考様式の問題に関わることなので本人は気づかないことが多く、それだけに、意識的に外国語の具体的な表現とその背後にある発想や思考様式とその表現パターンになじまない限り、容易には克服できない難しい問題である。

一例を挙げよう。日本人の英語のおかしさについて多くの発言をしているマーク・ピーターセンはその著書『ニホン語、話せますか？』の中で、日本人が気づかず書いてしまうおかしな英語の一例として以下の英文を挙げている。

Last weekend, I challenged the “Kawaguchi Marathon.”<sup>1</sup>

これは日本人学生が犯す典型的な誤りの一例である。本人は「先週末、私は川口マラソンに挑戦した」という意味で書いているのだが、実際の英語の意味は「先週末、私は「川口マラソン」に＜何かを＞して呼ぶ」という意味になる。英語の **challenge** は「挑戦する」という意味ではなく、「挑戦へ誘いかける」という意味であり、この一文は本人が意図した意味とは全く違う意味になっている。単語の正しい意味と語法を知らない時、その語を母国語と同じ感覚で使ってしまう。その結果、このような首を傾げるような、おかしな英文ができ上がる（なまじ日本語に「チャレンジする」というカタカナ語がはびこっているだけに、ついこうした英文を書いてしまう）。このような例は枚挙にいとまがなく、私の英作文の授業でもほぼ毎回出てくる。

## 事例

この論考では、事例を一つだけ取り上げ、それをもとに英語を書く際に現れるいくつかの問題点を吟味していくことにする。筆者は数年前ある公開講座を担当し、中学校及び高等学校で英語を教えている数名の教師に英詩について講義し、最後に英語によるレポートを提出してもらった。事例はそのレポートからとることとした（なお、レポートの課題は、17世紀イギリスの形而上詩人 Andrew Marvell (1621-78) の代表作の一つである「一滴の露に寄せて」(‘On a Drop of Dew’) の主題を分析しなさいというものだった)。

その英文レポートの中に次のような一文があった。仮に A さんの文としておく（日本語訳は私がつけたものだが、間違っていないと思う）。

Sun is also the creation of God, but its existence is much purer than humans and is far nearer to God.

(太陽もまた神の創造であるが、その存在は人間よりずっと純粋で、はるかに神に近い)

私はこの一文が、内容の面でも英語表現の面でも、非常に気になった。冒頭の **Sun** という語に定冠詞 **the** のつけ忘れがあることを除き、統語論的な間違いはなく、一見すれば、何の問題もない英文のように見える。しかし、ここには日本語の干渉による、少なくとも以下の5つの問題が含まれている(書いた本人は気がついていないだろう)。

1. **of** の使い方
2. **but** の使い方
3. **existence** の使い方
4. **humans** の使い方
5. **pure** という語の選択

以下の各節において一つずつ具体的に検討していく。

## 問題点 1. **of** の使いかた —— **of** の格について

まず出だしの “Sun is also the creation of God” (太陽もまた神の創造である) という部分において、**of** の格に関する問題がある。Aさんはこの一文を「神の創造」ないしは「神の創造物(神が創造したもの)」という意味で使っているようだが、Aさんの意図を考慮せずに普通の英語としてこの一文の意味を考えた場合、そのような意味にとることはほぼ不可能である。

### 1.1 [名詞 A] **of** [名詞 B]

一般に [名詞 A] **of** [名詞 B] となる構造の場合、この **of** の意味を正確に取るには、**of** の前の [名詞 A] が本来の名詞なのか、あるいは動詞から派生した名詞なのか、また動詞から派生した名詞の場合、もとの動詞は自動詞かそれとも他動詞かを考える必要がある。**of** の前の [名詞 A] が本来の名詞である場合、たとえば、“the lid of the box” や “the people of Wales” や “a man of great strength” のようなつながりの場合、読解の際も英語を書く際にもそれほど大きな問題は起きない(とは言っても、**of** には所有・帰属、出所・由来、性質・特徴、材料・要素、同格などさまざまな意味があり、**of** を挟んだ前後2つの名詞がどのような関係で結ばれているかを考える必要はある)。ここでは、**of** の前の [名詞 A] が動詞から派生していて、そこに動詞的な意味合いが潜んでいる場合の **of** の意味について考える。

動詞から派生した名詞の後に **of** が来る場合について、*Oxford Advanced Learner's Dictionary* [8th edition] (以下、OALD) は次のように説明している。“used after nouns formed from verbs. The noun after ‘of’ can be either the object or the subject of the action” (動詞から形成された名詞の後に用いられる場合、**of** の後の名詞はその行為の目的もしくは主体になることがある)。そして以下の4つの例を挙げている(説明の都合上、例文の順番を入れ替えた)。

#### 1.1

- a. the arrival of the police (= they arrive)
- b. the howling of the wind
- c. criticism of the police (= they are criticized)
- d. fear of the dark

OALD が挙げている 4 つの例のうち、of の前の名詞はいずれも動詞から形成された名詞である。その動詞派生名詞を細かく見ると、1.1.a の arrival と 1.1.b の howling はそれぞれ arrive と howl という自動詞から派生した名詞であり、1.1.c の criticism と 1.1.d の fear はそれぞれ他動詞 criticize と fear から派生した名詞である。自動詞から派生した名詞の場合、それに続く of 以下の名詞は主語として機能しており、他動詞から派生した名詞の場合、of 以下の名詞は目的語として機能している。したがって、1.1.a は「警察が到着したこと（＝ 警察の到着）」となるのに対して、1.1.c は「警察を批判すること（＝ 警察 [へ] の批判）」という意味になる。同様に 1.1.b は「風が吠え叫ぶこと（＝ 風の叫び [吹きすさぶ強風]）」となり、1.1.d は「暗闇を恐れること（暗闇 [へ] の恐怖）」という意味になる。すなわち、一般的に他動詞派生の名詞の後に of を続けた場合、通常その of は目的格的な意味を持つ。つまり、of 以下はその名詞が持つ動詞的な意味の目的語となるのが普通なのである<sup>2</sup>。

## 1.2 “the creation of God” の意味

A さんの使っている “the creation of God” という言い方に戻れば、creation という名詞は create（創造する）という他動詞に由来する派生名詞である。したがって、“the creation of God” という語句は、A さんが意図した「神の創造（神が創造すること）」という意味にはならず、「神を創造すること」という意味になるのが一般的である。creation という語と of の組み合わせの例として『ジーニアス英和大辞典』（以下、ジーニアス）は “The creation of a new committee”（新しい委員会の創設 ＝ 新しい委員会を創設すること）という例をあげている。手許にある他の辞書には以下のような例があがっている。

### 1.2

- a. since the Creation (of the world) (天地創造以来) [『ランダムハウス英和大辞典』以下、ランダムハウス]
- b. the creation of Israel in 1948 (1948 年におけるイスラエルの建国) [Macmillan]
- c. the creation of 2000 new jobs (2000 の新事業の創出) [Longman Dictionary of Contemporary English 以下、LDOCE]

いずれも of 以下の部分が creation の目的語的な意味になっている。つまり、creation という語は “the act or process of making something that is new, or of causing something to exist that did not exist before” (OALD)、もっと簡単には、“the act of creating something” (LDOCE) という意味であり、それに続く of は目的格な意味になるのである。

以上の説明からわかるように、A さんの英文 (Sun is also the creation of God) には of の意味の捉え方と使い方において問題がある。つまり、of = 「の」と単純に置き換えてはいけないのである。ちなみに上に挙げた例文 (1.1.a-1.2.c) は、いずれも日本語に直す場合、「の」と置き換えてもほぼ意味は通る（ただし、幾分か意味の曖昧さは残るが）。日本語の「の」という助詞は、英語の of と同じように、多義的で、多用されることが多く、そのことが発想の段階で of = 「の」 / 「の」 = of という日本人的な単純な置き換えを誘発することになるのだろう。

## 1.3 creation という語の意味

上記の説明で A さんの一文 “Sun is also the creation of God” の意味的なおかしさは明らかだと言えるが、しかし、万事解決ということにはならない。というのは、creation には上記の「創造すること」という意味のほかに「創造物（創造されたもの）」という具体的な物を示す意味もあるからである。名翻訳者として知られる中村保男氏は、一般に英語の名詞には「こと」と「もの」の両義を持つものが多く、たとえば、possession という名詞（動詞派生名詞）には「所有」という概念的な意味と「所有物」という

具体的なものを指す意味がある<sup>3</sup>と言う（後者は普通名詞として使用されるので当然不定冠詞が付き、複数形にもなる）。creation という語がそうした「もの」（「創造されたもの」）を表す意味で使われる例として、辞書には以下のような例文があがっている。

### 1.3

- a. Birds' nests are extraordinary creations.
- b. She is the writer's greatest comic creation.
- c. Have you seen my latest creation?

上記の例文の連語構造を見ると、いずれも creation の前に修飾語がついて創造物の特質が示され、creation の後に of 以下がついていないこと、具体的な「創造物」（創造行為の対象）は文の主語として提示されること（1.3.a と 1.3.b）、および創造に関与した主体を表す場合は所有格がその語の前についていること（1.3.b と 1.3.c）に注意したい。つまり、creation が「創造物」という意味で使用されるとき、上記のような連語構造で意味が完成し、その後に of 名詞が続きにくいということである。

### 1.4 「creation of 名詞」において of 名詞が主語となる場合

では、「creation of 名詞」という連語構造において、of 以下の名詞が主語として機能する場合は全くないかというといはそうでもない。たとえば、辞書には以下のような例を挙がっている。

#### 1.4

- a. the newest creation of the artist（その芸術家の最新の作品）[ジーニアス]
- b. the creation of a poetic genius（天才詩人の創作）[ランダムハウス]
- c. The bright murals in the children's ward were the creations of the nurses.（小児病棟の明るい壁画は看護婦たちの創作したものだった）[OALD]
- d. the creation of one's fancy（空想の産物）[ランダムハウス]

1.4.a – 1.4.c においては、of は明らかに主格的に機能しており、the artist、a poetic genius、the nurses は creation の主語となっている（1.4.d では、of は主格というよりむしろ由来・出所ととらえるべきだろう）。このような例があるからといって、A さんの “the creation of God” における of も主格関係を示すとするのが可能だとするのは難しい。というのも、上記の例は creation という語の意味が特殊な場合の用法であり、OALD によれば、語義の及ぶ範囲として「（創造されたものが）特に技能ないし想像力を示すような物」“(often humorous) a thing that sb has made, especially sth that shows ability or imagination” という限定が設けられていて、主に芸術作品などに使用されるからである（芸術的創造物と呼べないようなものに用いる場合は大げさな使用となり、しばしば滑稽味が生じることになる）。以上の点から、A さんの “the creation of God” を「神の創造物（神が創造したもの）」ととることに無理がある。

### 1.5 of の曖昧さ

前置詞 of の意味に関しては、いくらか曖昧なところがある。最も有名な例はエイブラハム・リンカーンのゲティスバーグ演説（The Gettysburg Address、1863）を締めくくる “government of the people, by the people, and for the people”（人民の、人民による、人民のための統治）という箇所における of の意味である。この of は主格（つまり、人民が統治すること）か、それとも目的格（すなわち、人民を統治すること）か、あるいは別の解釈になるのかという論争がかつて『英語青年』誌上で学会の著名人を巻き込んで繰り広げられたことがある。中野好夫氏は、この of は「第四格（目的格）的な of」で、「人民を治め



る政府」、すなわち、「人民を統治する」こと<sup>4</sup>とされ、その解釈をもとに当時の日本の政治について議論を展開されている。一方、英語ネイティブスピーカーの解釈は異なる。マーク・ピーターセンは、この of が目的格だという解釈に対して「英語圏で 141 年以上も続いてきた常識的受け止め方が引っ繰り返される、リンカーンも驚くに違いない、突拍子もない文法的解釈」とされ、この of は「由来・出所・起源」の意味で、「of the people は、いわば、「人民の合意の上で出来た」や、「人民の間から生まれた」などのような意味を表している」<sup>5</sup>としている<sup>6</sup>。

同様の曖昧さは“the love of God”という言い方にもある。この語句を何も考えずに日本語的に置き換えていくと「神の愛」となり、あたかも「神が人間に向ける愛」のような意味にとりがちである。しかし、これまで説明してきたように、love という名詞は他動詞 (love = 愛する) からの派生名詞であるため、of 以下は目的格的な意味になり、この語句は「神を愛すること = 神に対する愛・神への愛」という意味になるのが一般的な解釈である (それは、my love of nature [自然への愛] や He had a great love of music. [彼は心底音楽を愛していた] などの場合と同様である)。ただし、文脈によっては、of が主格関係を表して<sup>7</sup>「神が愛すること = (人間に対して) 神が抱く愛・神の慈愛」という意味で通る場合がある。しかし、of 以下を主格の意味で使うときは“God’s love”という形にし、所有格を love の前に持ってくるのが普通である (英和辞書にもそのことは書いてある)。あるいは、[the love of 名詞 for 名詞] という形で用いて主体と対象を明らかにする書き方が好まれる。OALD には“the love of a mother for her child” (母が子に対して抱く愛) という例があがっており、ここでは for her child があるために of は主格的な意味で機能していることが明確になり、of の格の曖昧さは解消されている。

さて、問題は、英語を書く際によく知っている (と思っている) of に潜む意味の曖昧さと正確な使い方について A さんがその意識をもっていたかどうかということである。その意識の欠如が「の = of」という機械的な言葉の置き換えにつながる。この言葉の置き換えこそが日本人学生が英作文の際に陥る最も大きな落とし穴なのである。当然、言葉の置き換えによってできた英文はごちなく、どこか日本語臭い (つまり、英語らしくない) 英語になる。もし A さんの英文を、英語の自然な発想と英語の構造に即した英文に書き直すとすれば、“The sun is also God’s creation” あるいは “The sun was also created by God” などとした方が適切だろう。

## 問題点 2. but の使い方 —— 英語の but は日本語の「が」に対応するか？

A さんは、“Sun is also the creation of God” の文と後続の文 “its existence is much purer than humans and is far nearer to God” を but で繋いでいる。つまり、“Sun is also the creation of God, but its existence is much purer than humans and is far nearer to God” としているが、この but の使い方にも問題がある。A さんはおそらく「太陽もまた神の創造であるが、その存在は人間よりずっと純粋で、はるかに神に近い」という日本語をそのまま英語に移したのだろう。

言うまでもなく、英語の but は前の文と後続の文を逆接的につなぐ等位接続詞である (たとえば、“It’s an old car, but it’s very reliable.” のような例文を見れば、逆接的論理関係は明らかである)。しかし、A さんの場合、「太陽が神の創造 (物) である」ということと「太陽の存在が人間より純粋であること」の間にどのような論理的な逆接関係が見出しようだろうか。そのあたりが今ひとつはっきりしない。たとえば、A さんの文を以下のように書き換えたとしてみよう。

The sun was also created by God, but (it was) not blessed (by Him)

この文での逆接関係は明白であろう。「神によって創造されたものは善として祝福されるはずである、だが、祝福されなかった」と意味のつながりが論理的に逆接になり、理解を阻むものは何もない。しかし、Aさんの文には、前の文と後続の文との間に明確な逆説的論理関係が存在しない。したがって、こういう場合に **but** を使うのは適切ではないということになる。

Aさんの文で逆接関係がはっきりしないのは、日本語の言葉の置き換えをしているからである。「太陽もまた神の創造（物）であるが、その存在は人間よりずっと純粹ではるかに神に近い」という頭のなかにある日本語がもとになって、その文中にある、日本語でよく用いる軽い接続の「が」を、論理関係を考慮せずにそのまま英語の **but** に置き換えてしまった結果、この非論理的な文が出来上がったのである。論理的関係の点からすれば、ここは **but** ではなく、むしろ **and** を用いる方が適切である。

The sun is also creation of God, and its existence is purer than humans.

ついでに言い添えておけば、英語の **and** には「それなのに」「それでいながら」といった **but** や **yet** に近い意味で用いられる<sup>8</sup>こともあり、そのことは英和辞書にも明記してある。

英語で **but** を用いるときは、前の部分とその後が続く部分が逆接的な論理関係になるということをしっかり意識しておくことが大切である。日本語では、ある文を紹介的な意味合いで持ち出し、その文に軽く「が」という語をつけ、後続の文との論理関係が必ずしも逆接的な関係でない場合が少なからずある。そのような場合、単なる言葉に引きずられて、その「が」を機械的に **but** に変換していくのは文の論理性という点で問題が生じることになる。たとえば、「私はそう思いますが、あなたはいかがですか？」(I think about it that way. How about you?) などはよく耳にする一例である。このような場合、接続詞は不要だが、もし “How about you?” の前に何かつなぎの言葉を置くとすれば、一般的には **but** ではなく、**and** の方が適切だろう。

### 問題点 3. existence の使い方 —— 「存在」 = existence という置き換え公式の落とし穴。

次の問題として **existence**（存在）という英語の使い方を検討したい。Aさんは “Sun is also the creation of God”（「太陽もまた神の創造（物）である」）に続けて “**but its existence is much purer than humans**” としている。「しかし、その存在は人間よりずっと純粹である」という意味の英訳である。ここには少なくとも以下の3つの次元で日本語の干渉が絡んでいる。

3.1 「存在」 = **existence** という機械的な置き換え

3.2 日本語における非論理的な比較

3.3 「存在」という語の頻繁な使用

#### 3.1 「存在」 = **existence** という機械的な置き換え

日本人学生はほぼ公式のように「存在」 = **existence** と考えて、英語を読むときにも書くときにも無反省にこの置き換え公式に従う傾向がある（Aさんの場合も同様である）。はたして英語の **existence** はどういう意味合いであり、どういう使われ方をするのだろうか。また、日本語の「存在」にあたる英語は **existence** のほかに **being** や **presence** などもあり、この3つの語にはどのような違いがあるのだろうか。

##### 3.1.1 **existence** と「存在」

英語の **existence** という語の意味合いを、この語が実際に使用された事例をもとに検討していく。たと

えば、次の英文に出てくる *existence* はどういう意味合いだろうか。

### 3.1.1

- a. His [Tom's] aunt and uncle would certainly do all they could do to stop him; they did not want him to use the garden, else why had they kept him in the dark about its very *existence*.<sup>9</sup> (Philippa Pearce, *Tom's Midnight Garden*)

この英文は「おばさんとおじさんはぼく（が庭に行くの）を止めるためだったら、きつとどんなことだってやりかねない。ぼくに庭を使わせたくないんだ。でなきゃ、なぜ庭があることそのものをぼくに隠していたんだ」ということである。この作品は、主人公のトムが病気のために預けられた叔父夫婦の家にある庭で真夜中に不思議な経験をするという物語である。引用文は、トムが叔父と叔母がその家に庭があることを隠しているのではと邪推する場面である。ここで “its very *existence*” という語は「まさしく庭が（そこに）あること」という意味で使われている。「その存在そのもの」と訳してもよいが、その具体的な意味合いは「庭がそこにあること」ということである。

- b. She [Louise] would kiss my parents calmly, without fuss, rather as though they were strangers, and she would not look at me at all. Not once ever. She ignored my *existence* completely.<sup>10</sup> (Margaret Drabble, *A Summer Bird-Cage*)

この箇所は「ルイズはいつも落ちついて、少しもあわてずに、私の両親にキスをした。まるで、初めて出会ったというみたいに。なのに、私の方は少しも見ようとしなかった。一度だって。彼女は完全に私の存在を無視した」という意味である。訳では “my *existence*” をそのまま「私の存在」としたが、その中身を考えれば、「私がそこにいること」すなわち、「その場にいる私」（を全く無視した）という意味合いである。この部分は “she ignored me completely” としても意味に大きな変化はないが、“my *existence*” となれば、単なる「私」ではなく、「その場にいる私」というより具体的な感覚が伝わる。

さらに、この例文には、問題点 2 の *but* の使い方との関連で、*and* の使い方にも注意する必要がある。日本語では「そして」としてもおかしくはないが、文脈を考慮すると、「なのに」や「だけど」といった逆接的なとり方の方がこの箇所のニュアンスをうまく伝えている。つまり、「私の両親には初対面のように愛想よくキスをするのに、私に対しては、その場にいる私が目に入らないかのように私を無視している」というニュアンスである。

- c. Crime is commonplace, *existence* is commonplace, and no qualities save those which are commonplace have any function upon earth.<sup>11</sup> (A. C. Doyle, *The Sign of Four*)

これはシャーロック・ホームズ・シリーズの第 2 長編『四つの署名』（*The Sign of Four*）の中の一文である。事例 3.1.1.a と 3.1.1.b では、*existence* という語を所有代名詞が修飾していて、主語と述語という関係が明確であったが、ここでは無冠詞で用いられており、前の事例とは意味合いが多少異なる。仮に *existence* をそのまま「存在」という日本語に置き換えて、“*existence is commonplace*” という一文を日本語に直訳すると、「存在は平凡である」となり、意味は今ひとつはっきりしない。試しに翻訳（延原謙訳 [新潮社]）を参照すると、「このごろでは犯罪も平凡だし、われわれの生活も平凡だ」となっていて、*existence* が取る具体的な意味合いを十分に伝えている。

*existence* という語は、「存在」「現存」「実在」という抽象概念的な意味から、語の使用域が具体的な次元に拡大されていき、「生存のしかた、（生活）様式、生活」という意味になる。つまり、第一に「存在していること」（state of existing）という語義があり、それが具体的な次元で用いられると



きには「存在のあり方」「生き方」(a way of living) という意味となり、さらには「生活ぶり」「暮らし(ぶり)」といったより具体的な手触りのある意味が派生してくるのである。

以上 3 つの具体的事例を通して英語の *existence* が使用される時の意味合いを見てきた。その意味合いがわかれば、次の 2 例の意味は説明を要しないだろう。

### 3.1.1

- d. ... and some of the younger people in the town openly doubted the existence of any dragon in the mountain, and laughed at the greybeards and gamblers who said that they had seen him flying in the sky in their young days.<sup>12</sup> (J. R. R. Tolkien, *The Hobbit*)
- e. Under covering of darkness and invariably wearing old black clothes for camouflage, Brodie began his double existence, subverting conventions and the order of society.<sup>13</sup> (Raymond McNally and Radu Florescu, *In Search of Dr. Jekyll and Mr Hyde*)

3.1.1.d は、「(何らかの竜が山中に) 存在していること＝生息していること」ということであり、3.1.1.e は「生活様式」といったような意味で使われており、「ブローディーは、闇に紛れ、カモフラージュ用に常時古びた黒い服を着て二重生活を始めた」ということである。

### 3.1.2 being と「存在」

日本語の「存在」にあたる英語には *existence* の他に *being* という語がある。この語は *existence* と同義の抽象的な意味で使用される場合もあるが、多くの場合、可算名詞として具体的な意味合いで使われる。その場合、*existence* とは異なる具体的な意味を帯びる。具体的な実例を見ていこう。

#### 3.1.2

- a. When I was young, I had to choose between the life of being and the life of doing. And I leapt at the latter like a trout to a fly.<sup>14</sup> (Ursula K. Le Guin, *The Farthest Shore*)  
ここでは無冠詞であることから「存在」という抽象的な意味で使用されていることは明らかで、*existence* とほぼ同義である。つまり、「私」は、若い時、“the life of being” (「存在の生」、すなわち、存在しているだけの生き方) と “the life of doing” (「行動の生」、すなわち、自ら行動して人生を切り開いていく生き方) のいずれかを選択しなければならなかったというのである。*being* が *existence* と同義の場合は、“come into being” や “bring something into being” といった熟語で用いられる場合が多い (たとえば、The Irish Free State came into being in 1922. [OALD])。その場合、不可算名詞での使用となり、一般に冠詞はつかない。

- b. I doubted at first whether I should attempt the creation of a being like myself, or one of simpler organization;<sup>15</sup> (Mary Shelley, *Frankenstein*)

これはメアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』からの一文で、若き科学者 Victor Frankenstein が人造人間を造るときにどのように造ろうかと考える場面である。「私は最初、私自身のような存在を造ろうか、それとももっと単純な組織を持ったものを造ろうかと思案した」という意味である。あえて、ここでは「存在」という訳語を使ったが、むしろ「生き物」とした方がしっくり来る。文脈から推測できるように、英語の *being* が具体的な意味で使用される時は「存在しているもの」という語義になる。つまり、「生き物、生物」というような意味として用いられ、その場合は、普通名

詞として扱われ、複数形にもなる。

- c. So thought the mother, and thought, likewise, that the new snow, just fallen from heaven, would be excellent material to make new beings of, if it were not so very cold.<sup>16</sup> (Nathaniel Hawthorne, “The Snow Image”)

ホーソーンの短編からとったこの例でも、beings は「生き物」という具体的な意味で使用されている（そのことは複数形で用いられていることから明らかである）。「母親はそう思った。そして、同じように、空から降ったばかりの新しい雪は、もしそんなに冷たくなければ、新しい生き物を作るには最高の素材だろうとも思った」といった意味になる。

以上の例からもわかるように、日本語の「存在」に当たる being という語が具体的な次元で用いられる時、「存在しているもの」つまり、「生き物、生物」(a living creature / a living thing) という意味となり、existence という語が表す具体的な意味（「そこにいること・生活様式・暮らしぶり」）とは異なる。また、普通名詞であるため、何らかの冠詞相当語句をつけるか複数形で用いることになる。LDOCE は “a story about alien beings who invade Earth”（地球を侵略する異星人の物語）という例文を挙げている。

### 3.1.3 presence と「存在」

さらに、presence という語も日本語の「存在」にあたる（しかし、日本人学生がこの語を使用することは殆どない。この語は彼らの使える語彙の中に入っていないのである）。この語は、辞書の定義では、“the fact of being in a particular place”（ある特定の場所にいること）となっており、existence とよく似た意味合いだが、「ある特定の場所に（居合わせる）」というように、存在している場所が限定されている点が existence と異なる点である（この語が「出席」という意味の日本語に当たるのも、「出席」とはある特定の場所、たとえば、教室や集会所にいることという含みがあるからだろう）。実際の使用例を見てみよう。

#### 3.1.3

- a. And thus, too, it happened, perhaps, that before the last echoes of the last chime had utterly sunk into silence, there were many individuals in the crowd who had found leisure to become aware of the presence of a masked figure which had arrested the attention of no single individual before.<sup>17</sup> (E. A. Poe, “The Masque of the Red Death”)

E. A. ポーの短編「赤死病の仮面」から引いたこの例は、それまでそこにいる誰の注意もひかなかった仮面を付けた人物が自分たちの面前にいることに気づくだけのゆとりはあったということである。「存在」という日本語をあてても意味は通るが、意味合いとしては「その場に、自分たちの面前に、すぐそばにいること」というニュアンスである。

- b. In the early ages of the world, we know, it was believed that each territory was inhabited and ruled by its divinities, so that a man could cross the bordering heights and be out of the reach of his native gods, whose presence was confined to the streams and the groves and the hills among which he had lived from his birth.<sup>18</sup> (George Eliot, *Silas Marner*)

この例と次の例の presence の意味合いは 3.1.3.a と微妙に異なる。ともに「神的なもの」(divinities) や「土地の神々」(native gods) が presence の主体であり、客観的に存在しているというよりもその場に気配として感じられる存在というニュアンスを含んだ意味合いである。presence には、このように、目に見えなくとも自分たちのすぐ側にいるように感じられる存在を指すときにも

用いられる。

- c. Jewell also had a way of summoning the spirit of nature into his haiku so that you felt its presence – in the sound of thunder along a beach or in the silence of a moonrise.<sup>19</sup> (Cor van den Heuvel (ed.) *The Haiku Anthology*)

この例も 3.1.3.b と同じように *presence* は「自然の精霊」(a spirit of nature) がそこに潜んでいるように感じられる存在の気配について言及した例である。*presence* は *existence* と異なり、具体的な次元にその使用域が拡大される時、その存在が気配や雰囲気としてその場にあるように感じられる場合に用いられることが多い。それが、一方ではある印象深い存在感のある「風采」や「態度」という意味合いとなり、他方では普通名詞となって「霊」「神霊」「精霊」といった、確たる実体がないにも関わらずその場にいるように感じられる存在を指すようになる。OALD は “a person or spirit that you cannot see but that you feel is near” という語義を挙げ、“They felt a strange presence in the deserted house.” (彼らはその廃屋に不思議な気配を感じた) という例を挙げている。

さて、ここでもう一度 A さんの “its existence is much purer than humans.” という表現を考えてみよう。この文を英語として考えた場合、its existence という箇所は「それ(太陽)がそこにあること = そこに存在していること」という意味になり、「太陽という存在物」という意味にはならない。とすると、それに対する述語の部分 (is much purer than humans [人間よりはるかに純粋である]) とのつながり具合は相当おかしいものになる。そこに次の問題が浮上することになる。

### 3.2 日本語における非論理的な比較 —— 比較構文における比較の対象

A さんの “its existence is much purer than humans.” という英文は比較の文であるにも関わらず、厳密な意味での比較にはなっていない。言うまでもなく、比較する際の前提として、比較される対象は同一の範疇に属するものでなければならない。比較構文を書く時に日本人学生が犯す間違いの一つは、比較する対象が属する範疇の不統一である。一例を挙げると以下の 3.2.a のような英文が頻出する。

#### 3.2

- a. The population of Tokyo is larger than Osaka. (東京の人口は大阪よりも多い)

「東京の人口」と比較されるのは、「大阪」ではなく、「大阪の人口」でなければならない。したがって、3.2.a は正しくは “The population of Tokyo is larger than that (= the population) of Osaka.” としなければならない。しかし、日本語では、比較の範疇に対する意識が概して希薄であり、「東京の人口は大阪よりも多い」で通じてしまう。そのため、そうした日本語的な発想による文構造をそのまま英語に直してしまい、結果的に英文としては非論理的な比較の文になることが多い。

A さんの場合も同様の間違いである。A さんの英文では「太陽がそこにあること」(its existence) と「人間」(humans) が比較されている。つまり、片方は「太陽が存在していること」(という事象) であるが、他方は「人間」(という種) となっていて、比較されるものの範疇が異なっており、厳密に言えば、これでは比較が成立しない。したがって論理的な英文ではない。

おそらく、A さんは「太陽という存在(被造物)」と「人間という存在(被造物)」を比較の対象に考えていたのであろうが、そこまで思考を論理的に厳密化せずに日本語的なルースな発想をそのまま英文に移していった結果、上記のような非論理的な比較の文章ができ上がったのだろう。

### 3.3 「存在」という語の頻繁な使用

一般に日本人は「存在」という言葉を好み、文章や会話で多用する傾向があると私はかねがね思っている。学生のレポートにもこの語がよく出てくるし、私たち日本人の普段の日常会話でも、哲学的な次元での「存在」や「実存」といったような意味合いとは関わりなく、普段の言葉として使用される。日本語は、その発想において、この「存在」という語を軽い日常語的な次元で扱うことを許容する言語である。一方、英語では *existence* という語が抽象概念的な意味（つまり、「存在」という硬い意味で）として使用されることはある特定の専門的分野での議論という文脈に限られているように思う。

もちろん、英語においても日常会話では、“My philosophy is to take all the opportunities you can in life.” [OALD] のように、学術的な硬い語が本来の厳密な定義から離れて日常生活に馴染んだ意味合いで使用されることはある（上の例で言えば、*philosophy* は「人生観」「方針」といった意味での使用）。また、多くの抽象名詞は具体的な次元にまで使用域を広げ、手触りのある普通名詞としての意味を獲得していくのが一般的である。しかし、そのような使用領域の変化における語義の拡大や派生がどのような方向性をとるのか、すなわち、どのような具体的意味合いで用いられるかに対してはよく吟味する必要がある。必ずしも英語が日本語と同じような具体的な意味合いを獲得するとは限らないからである。

A さんの “its existence is much purer than humans” という英文は日本人に馴染んだ発想に基づく直訳的な英文で、日常的に普通に用いる「存在」という語をそのまま英語に置き換えてしまった結果である。英語では、わざわざ「存在」という語を持ち出す必要はなく、英語としてみた場合、英語らしい簡潔さに欠ける。この箇所は、日本語的に「その存在は」と言わずに、簡単に ‘*it is much purer than humans*’ とすればすむことであり、むしろそうすることで、A さんの頭の中にある「その（太陽という）存在は人間よりはるかに純粋で」という日本語とほぼ等価の意味を表すことになる。また、こちらの方が英文としてはすっきりしているし、3.2 で指摘した比較する対象の非論理性という問題も生じない。

### 問題点 4. humans の使い方 —— 「人間」という語に当たる英語は何か

再び先ほどの英文 (“its existence is much purer than humans.”) に戻り、ここでは A さんが「人間」という意味で用いている *humans* という単語の使い方を俎上に上げる。最近、この *human* という単語を、あまり考えることなく、「人間」という意味の普通名詞として用いる学生をよく見かける。しかし、この *human* という語は「人間の、人間特有の、人間に関する、人間らしい」といった意味の形容詞として用いることが一般的である。たとえば、定着した言い方として *human body*（人体）、*human nature*（人間の本性）や *human interest*（人間的興味）、*human right*（人権）、*human error*（人為的ミス）、*human shield*（人間の盾）などは辞書に収録されている。以下の例もそのような使用法の一つである。

The human mind is capable of forming mental images of things not actually present.<sup>20</sup> (J. R. R. Tolkien, “On Fairy-Stories”) (人間の精神は現実には存在しないものについて心的映像を作り出すことができる)

#### 4.1 man という語

従来、「人間」という意味を表す英語として *man*（単数無冠詞）という語が用いられた。たとえば、アリストテレスが下した人間の定義として有名な「人間は社会的動物である」という文は “Man is a social animal.” という形で辞書にも掲載されていた。同様に「人間は万物の尺度である」という文は “Man is the measure of all things.” とされてきたし、人口に膾炙した聖書の文句「人はパンのみにて生きるにあらず」（マタイ伝 4 章 4 節）は “Man shall not live by bread alone.” とされた。以下の文もそのような使用例である。



#### 4.1

- a. I wonder who it was defined man as a rational animal. It was the most premature definition ever given. Man is many things, but he is not rational.<sup>21</sup> (Oscar Wilde, *The Picture of Dorian Gray*)
- b. Yet I am not more sure that my soul lives, than I am that perverseness is one of the primitive impulses of the human heart - one of the indivisible primary faculties, or sentiments, which give direction to the character of Man.<sup>22</sup> (E. A. Poe, “The Black Cat”)

いずれの使用例も人間一般の普遍的な特徴に言及した内容であり、そのような場合は *man* という語で十分に表現できた (*man* を受ける代名詞は *he* であった)。

しかし、この *man* という語には「男・男性」という意味もあり、そのような意味を持つこの語で「人間」全体を集散的に表すことに対して 1960 年代から女性たちから批判の声が上がり、この語は女性蔑視のイデオロギーを含んだ性差別的な語とみなされて現在では避けられる傾向にある。そのような *sexism* の影響で、現在では「警察官」が *policeman* から *police officer* となり、*spokesman/spokeswoman* が *spokesperson* に取って代わられている。同様の理由で *stewardess* が *flight attendant* に、*actress* が *actor* に、*man power* が *work force* にというように性に言及しない言い方がされるようになっている。

では、「人間」という一般的な意味を表すときにはどのような語を用いればよいか。最も適切な言い方は *a human being / human beings* という言い方だろう（これは普通名詞なので不定冠詞もつけば複数形にもなる）。また、集散的に「人間一般」ないし「人類」という意味合いのときは *human beings*、*human race*、*humankind*、*humanity* などが一般的である（「人類」という意味の *mankind* は、*man* と同じく「男・男性」という意味合いがあり、避けられることが多い）。

#### 4.2 *human* という名詞 —— その使用のコンテキスト

A さんが用いている *human* という語には確かに普通名詞として「人間」という意味がある（ただし、OALD はじめ多くの英英辞典には “also human being” と書き添えてあり、『ランダムハウス』には「一般には *human being* を用いる」と注記してある）。「人間」というときは *a human being/human beings* を使うのが適切とは言え、この *human* という語が名詞として用いられる適切なコンテキストもある。生物学的な種の相違に言及する文脈において用いるとき、この *human* という名詞は最もしっくりくる使い方と言えるだろう。

たとえば、2009 年に封切られたドキュメンタリータッチの SF 映画『第 9 地区』(*District 9*) において、“No Humans Allowed”（人間立ち入り禁止）や “For Use By Humans Only”（人間専用）という言い方が出てくるが、これは異星人との対比において用いられた言い方である。この映画は、宇宙難民となった大量の異星人 (*Aliens*) を載せた巨大な円盤が 20 年近く北アフリカ上空に停止し、人道上的観点から「エビ」と呼ばれる難民異星人を地上におろして住まわせることになるが、地元の人々とトラブルを起こし、異星人は特別な地区に押し込められて暮らすことになり、最終的にその地区は危険なスラム街のようになってしまう。上記の表現はそのスラム街のあちこちに立ててある看板に書かれた文句である。すなわち、ここでは、人間と異星人という種の違いが前提になっているため、この *humans* という語の使用は適切な使い方なのである。

同じような文脈における *human* という名詞の使用例は、テッド・チャンの短編 “Story of Your Life”（「あなたの人生の物語」）を映画化した 2016 年の SF 映画『メッセージ』(原題: *Arrival*) にも見える。この映画では異星人とコミュニケーションを図ろうとするアメリカ人言語学者がボードに “HUMAN”（人間）



と書いて、地球に住む自分たちは「人間」（という種）だと伝えようとする。この場合も『第9地区』と同じく、種の相違が前提となった文脈での使用である。

OALD には human という語が名詞として項目立てされているが、その語義として “person rather than an animal or a machine” となっており、動物や機械との違いが含意されている。したがって、そこにあげてある例文 “Dogs can hear much better than humans.” も「犬」（という生物の種）は「人間」（という生物の種）よりも耳がよく聞こえる」という種の違いを前提にした使い方になっている。つまり、human という語を名詞として用いるときは、種の相違という文脈（たとえば、人間 vs. 動物、人間 vs. 異星人、人間 vs. ロボット、人間 vs. 妖精といったような文脈）において用いるのがもっともこの語に適した使い方なのである。そうした他の種との比較対象がない文脈で人間一般に関する特性を述べる際には、先に上げた human beings や human race、humanity、あるいはもっと一般的な people や men and women などのほうが適切な語の選択と言えるだろう。

以上のような human という名詞が使われる文脈の特徴がわかれば、以下の 2 例における human と human beings の使い方の違いは明らかだろう。

#### 4.2

- a. But her song told also that then, in the beginning, dragon and human were all one. They were all one people, one race, winged, and speaking the true Language.<sup>23</sup> (Ursula K. Le Guin, *Tehanu*)

ル=グァインの「アースシー物語群」第4巻『テハヌー』（*Tehanu*）から引用したこの箇所は、原初、人間と竜は一つの種族であり、翼を持ち、ともに真の言葉を話したという内容を伝える箇所である。ここでは、human という語が名詞として「人間」を意味しているが、それは「竜」という種族との対比で用いられており、種の違いに基づく文脈での使用であるため、適切な使い方と言える。しかし、2 頁程先に行くと “Ever since that day, I [i.e. Ogion] have wondered if anyone, man or dragon, has been farther west than west; and who we are, and where our wholeness lies.” とあり、古い man という言い方が出てくる。

- b. ... which makes us older human beings, with our inward turmoil, feel a certain awe in the presence of a little child, such as we feel before some quiet majesty or beauty in the earth or sky-- ...<sup>24</sup> (George Eliot, *Silas Marner*)

4.2.a に対し、ここでは human beings という言い方が用いられている。文脈を見てみると、ここは特に種の相違や対比を前提にした言い方にはなっておらず、人間は歳を取ると、幼な子の前に出るとある種の畏怖の念を感じるようになるという趣旨で、歳を重ねた人間一般の特徴を表現した一文である。このような場合には a human being / human beings を用いることの適切さが伺える。

以上のことを考慮すると、A さんの英文 “its existence is much purer than humans.” における humans という語は human beings に変えた方が文脈的にはしっくり落ち着くと言えるだろう（太陽を人間と対比可能な種ととらえることには無理があるだろう）。

これまで指摘してきた問題点は、日本人が思考の道具として用いる日本語の構造が英語表現にどのような影響を与えるか、そしてその結果、いかにぎこちない英文——日本語的な発想が裏に透けて見える英文——が生じるかということであった。これまで吟味してきた問題点を考慮して A さんの英文を書き直すと以下のようなになるだろう（下線は変更した箇所）。

The sun is also God's creation, and it is much purer than human beings and (is) far nearer to God.

では、これで英文としては問題がないかと言うと、実はそうではない。もう一つ別の問題が潜んでいる。それは A さんが使っている **pure** という語に関するもの、すなわち、適語の選択という問題である。これは日本語の言語的干渉でもあるが、同時に日本人的な感性、とそれに基づく発想に関わる問題である。

## 問題点 5. pure という語について —— 適語の選択という問題

再び “its existence is much purer than humans” という箇所に戻る。A さんはこの一文で「太陽の存在は人間よりずっと純粋である」という意味を表そうとしているが、内容的にはずいぶんと違和感のある文である。「その存在が人間よりずっと純粋である」というのは一体どういう意味なのか、まず、それがはっきりしない。A さんは、「純粋である」(**pure**) という語を、特にあらためて説明を必要としない自明の語のように用いているが、「存在が純粋である」とはどういう意味なのだろうか。感覚的にはなんとなくわかったようで、もう一步進んで意味内容を厳密に確定しようとするとなんか曖昧になってくる(ちなみに、この「純粋な」という語も、「存在」と同様、日本人の好きな言葉の一つである。日本人に共通する特徴的な物の見方・感じ方の表れだろう)。

「太陽(という存在)は純粋である」というのは、たとえば、太陽は人間よりも早く、人間が原罪を犯す前の純粋物質(すなわち、第 5 元素 = **quintessence**) で創造されたからその分だけ人間の罪の穢れに染まっていないということだろうか。あるいは、太陽は神そのものを表象する光の源だから、人間より「純粋」だということなのだろうか。A さんがそのつもりで書いたのだと言うのなら、以上のような根拠まで(別の根拠があるのなら、その根拠まで)書いておかないと「純粋である」(**pure**) という語の意味がはっきりしない。

因みに英語の **pure** という語は、OALD によると、以下のような語義項目に分けてある。例文とともに示す。

1. not mixed with anything else / e.g. These shirts are 100% pure cotton.
2. clean and not containing any harmful substances / e.g. The air was sweet and pure.
3. complete and total / e.g. They met by pure chance.
4. very clear; perfect / e.g. beaches of pure white sand / a pure voice
5. without evil thoughts or actions, especially sexual ones; morally good / e.g. His motives were pure.
6. concerned with increasing knowledge of the subject rather than with using knowledge in practical ways / e.g. pure mathematics / technology as opposed to pure science subjects
7. not mixed with any other breed or race / e.g. These cattle are one of the purest breeds in Britain.

以上 7 つの語義に分けてあるが、意味の中核をなす概念は「他のものが混ざっていない」ということである(日本語的な「清らかな・穢れがない・清純な」といった人柄や道徳的な含みをもつ語義もあるが、それは中核的な意味から派生した意味であり、最も優勢な語義ではない)。このような意味あいをもつ **pure** という語を、太陽という存在を主語にしてその述語に用いるのは、意味の通りやすさ・理解可能性という観点からはかなり無理がある。統語論的には可能であるにしても、意味内容の点からすれば、適切な連語関係とは言えず、意味を理解するのにかなりの困難が伴う。

同様にあとに続く「(太陽の存在は) 神に (人間よりも) はるかに近い」([sun] is far nearer to God) という箇所もどういう根拠でこういうことが言えるのかははっきりしない。たとえば、神は人間を超越しているが、同時に、人間一人ひとりの中に神は内在していると考えれば、人間の方が太陽よりもはるかに神に近いとも言える。また、「神はその似姿に人間を造った」(God created man in His own image) という

のは聖書に出てくるよく知られた言い方である。であれば、人間は本来的に神の性質（神性）を賦与されていることにもなり、この点でも人間は太陽よりも神に近いと言えないこともない。

pure という語の使用に戻る。A さんはこの pure という語を、その中核的な語義と派生的な意味を十分に吟味しないまま、日本語の「純粋な」という語の置き換えとして用いているようである。その結果、個人的な感覚や通俗的観念に基づいた書き方になっている。確かに、英語の pure と日本語の「純粋な」はそれぞれが包括する意味範囲は重なる部分も多いが、そのニュアンス等はやはり異なる。pure という語はどういう語と結びつくかということを吟味していけば、その意味合いのズレが幾分かは明らかになるが、A さんはおそらく「pure = 純粋」という意識で書いてしまったのだろう。詩の分析としてこの一文をみれば、A さんのこの文はマーヴェルの詩の解釈には直接的に関係があるとは思えない。ただ、マーヴェルの詩をもとに自分なりの感覚的・通俗的理論を展開しているだけであって、詩の分析にはほとんど貢献していない。詩の解釈一つ行なうにしても、基本的な西洋思想や概念、当時の思考様式や文化的知的状況をそれなりに心得て、それらを伝える適切な英語の単語を選択するという意識を持たなければ、日本人的な感覚が表にでてきて、英語表現の面で英語らしさが少なくなることを指摘しておきたい。

では、A さんの問題の一文はどう直したらいいだろうか。A さんの意を汲んで（もちろん汲みきれないが）次のようにしてみたが、どうだろうか。

The sun is more divine than man since it was created by God before every living thing and the material of which it is made is not tainted by man's original sin.

あくまでも一例である。また、たとえ以上のようにそれなりの理由を示して、文意を多少明確にしたところで、神学的な観点から見たとき、内容そのものが正しいかどうかは私には判断できないことは言い添えておく。

## 終わりに

この論考では、日本人が英語を書く際、母国語である日本語の言語構造や日本語に基づく言語感覚や発想が干渉してくる様子を一つの実例を挙げて、具体的かつ詳細に吟味してきた。主として言葉の機械的な置き換えという形で現れてくる母国語の干渉をできる限り避け、英語らしい英語を書くにはどうすればいいか。常識的な答えになるが、英語に習熟し、英語という言語の構造や生理や癖をよく知ること、そしてその背後にある発想や事物のとらえ方に馴染むこと以外にないと筆者は考える。言うまでもなく、言語の習得において、アウトプットはインプットがあつてはじめて成立する。つまり、正しい英語の文法や語法の知識を身につけるだけでなく、authentic English（純正な英語）にできるだけ多く触れることで、日本語と英語の発想や表現の違いを認識し、自覚的に英語的感覚を身につけることが大切である。具体的には「聞くこと」や「読むこと」というインプットの量を増やし、それをもとにして英語らしい語法や表現パターンを習得し、そのパターンに自分の言いたいことを流し込むようにして伝えたい観念を表現するよう訓練することが大切である。英語の定形の表現パターンは日本語的な発想を英語的な発想に変えてくれる重要な変換器なのである。「英作文」の授業において筆者が「英語の表現パターン」を重視する理由もそこにある。

## 注

1. マーク・ピーターセン『ニホン語、話せますか?』（東京：新潮社、2004）pp. 8-10.
2. 『英語語法大辞典』には、明確に「of が目的語関係を示す場合、of の前に位置する語は、他動詞からきたものか、あるいは他動詞的な意味をもつ名詞であることが普通です」と記してある。石橋幸太郎他編『英語語法大辞典』（1981、大修館）p. 990.
3. 中村保男『イメージとしての英語』（BABEL 双書）（1981、東京：日本翻訳家養成センター）pp. 81-2.
4. 中野好夫『酸っぱい葡萄』（東京：みすず書房、1979）pp. 261-2.
5. マーク・ピーターセン『ニホン語、話せますか?』（東京：新潮社、2004）pp. 38-39. マーク・ピーターセンはさらに続けて、「リンカーンはこの言葉で「government = 政治」を説明しているわけで、government に統治されるのは the birds でも the flowers でもなく、the people だよ、とわざわざ述べる必要も意図も、言うまでもなく、ない。」つまり、統治されるのは人民であるのは当然のことなのでわざわざ必要はないことだとしている。
6. この有名な一節の解釈に関しては、前置詞 of だけでなく、その前の government が本来の名詞か動詞派生名詞かどうかに関わってくる。詳しくは、野村忠央「“government of the people” の解釈について」『英語と英語教育の眺望』日本英語英文学会（2010）199-214. <http://www.jaell.org/gakkaishi20th/Tadao%20NOMURA.pdf> を参照。
7. この場合、love という語が動詞派生名詞という感覚が薄れ、本来の名詞のような扱いをされているためであろう。その場合、of は主格というよりもむしろ所有関係や出所・由来を表すとする方が適切であろう。
8. 英語読みの達人である行方昭夫氏はその著書の中で and の意味合いについて以下のように述べている。「And が文頭に来る場合、統計的に調べたわけではないですけど、軽く「そして」ということは少なく、「さらにもう一つ」とか「それなのに」とかと、強調していることが多いと思います」[行方昭夫『英語のセンスを磨く 実践英語への誘い』（東京：岩波書店）p. 100.]
9. Philippa Pearce, *Tom's Midnight Garden* (Puffin Books) (London; Penguin Books, 1976) p. 30.  
以下、具体的事例は、紙数の関係上数例にとどめるが、もっと多くの使用例が手許にある。
10. Margaret Drabble, *A Summer Bird-Cage* (London; Penguin Books, 1967) p. 102.
11. Arthur Conan Doyle, *The Sign of Four*, (London; Penguin Books, 1985) p. 15.
12. J. R. R. Tolkien, *The Hobbit*, (London; HarperCollins Publishers, 2000) p. 182.
13. Raymond McNally and Radu Florescu, *In Search of Dr. Jekyll and Mr Hyde* (London; Robson Books, 2001) p. 33.
14. Ursula K. Le Guin, *The Farthest Shore*, (New York; Simon and Schuster. Inc., 2004) p. 45.
15. Mary Shelley, *Frankenstein* [Oxford World's Classics] (Oxford; Oxford Univ. Press, 1998) p. 53.
16. William Charvat, Roy Harvay Pearce, and Claude M. Simpson (eds.), *The Century Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (vol. XI), "The Snow Image & Uncollected Tales" (Ohio State Univ. Press, 1974) p. 9.
17. David Van Leer (ed.), "The Masque of the Red Death", *Edgar Allan Poe: Selected Tales* [Oxford World's Classis] (Oxford; Oxford University Press, 1998) p. 132.
18. George Eliot, *Silas Marner*, [Oxford World's Classics] (Oxford; Oxford Univ. Press, 1998) p. 116.
19. Cor van den Heuvel (ed.), *The Haiku Anthology* (New York; W. W. Norton & Company, 2000) p. li.
20. J. R. R. Tolkien, "On Fairy-Stories", *Tree and Leaf* (London; HarperCollins Publishers, 2001) p. 46.
21. Oscar Wilde, *The Picture of Dorian Gray* (London; Penguin Books, 1989) p. 52.
22. David Van Leer (ed.), "The Black Cat", *Edgar Allan Poe: Selected Tales* [Oxford World's Classis] (Oxford; Oxford University Press, 1998) p. 232.
23. Ursula K. Le Guin, *Tehanu*, (New York; Simon & Schuster, 2004) p. 14.
24. George Eliot, *Silas Marner*, [Oxford World's Classics] (London; Oxford Univ. Press, 1998) p. 116.